もしもきつねぼうです

三田村信行作　佐野洋子絵

913 三田村信行（みたむらのぶゆき）
もしもしきつねくまぞうです
偕成社 1983
133p. 22cm
（新選創作どうわ 18）

もしもしきつねくまぞうです

1983年9月 初版第1刷発行

著 者 三田村信行
画 家 佐野洋子
発行者 今村 廣

発行所 株式会社 偕成社（かいせいしゃ）

東京都新宿区市ケ谷砂土原町3の5
電話 編 集(03)260-3229(代)
その他(03)260-3221(代) 振替 東京5-1352番

本文印刷 新興印刷製本株式会社
多色印刷 小宮山印刷株式会社
製 本 文勇堂製本工業株式会社
©三田村信行，佐野洋子 1983
◇落丁本・乱丁本はおとりかえいたします
Published by KAISEI-SHA, Printed in Japan.
ISBN4-03-517180-8

もしもしきつねくまぞうです

三田村信行作

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

きつね・くまぞうくんを紹介します。

くまぞうくんは、わたしの新しい友だちで、つい最近知りあったばかりですが、なかなかいいやつです。

いま、くまぞうくんは、ちょっと遠いところへいっていますが、かえってきたら、ひょっこりみなさんのところへ、すがたをあらわすかもしれません。

そのときは、どうかくまぞうくんの話をきいてやってください。きっとおもしろい話をきかせてくれるでしょう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もくじ

1 ふしぎな電話……8
2 はいたのはいしゃさん……27
3 ひみつの夜……55
4 ラクダはさばくへ……80
5 あったかいゆめ……100
6 きつねのゆくえ……119

著者／三田村（みたむら） 信行（のぶゆき）

1939年東京に生まれる。早稲田大学文学部卒業。出版社に勤務のかたわら，同人誌「児童文学者」「蜂起」に作品を発表。主な著書に『すっとびぎつね』『おとうさんがいっぱい』『風を売る男』『サインはきつねボール』『ねこかぶり小学校』『ウルフ探偵のおかしな事件』などがある。

画家／佐野（さの） 洋子（ようこ）

1938年，北京に生まれる。武蔵野美術大学デザイン科卒業後，'67年から'68年にかけてベルリン造形大学でリトグラフを学ぶ。『わたしのぼうし』で講談社出版文化賞，『わたしが妹だったとき』で新美南吉児童文学賞を受賞。主な作品に『おじさんのかさ』『おれはねこだぜ』『100万回生きたねこ』などがある。

もしもしきつねくまぞうです

三田村信行作

1　ふしぎな電話

わたしはどうわを書いています。あまりゆうめいではないけれど、それでもどうわの本を四、五さつはだしています。おかげでわたしは、近所の人たちから、

「ゆめのあるお仕事をしてらっしゃるんですねえ。」

とか、

「心がきれいでいらっしゃるんですね。」

とかいわれます。

どうわを書くのがゆめのある仕事かどうか、どうわを書く人は心がきれいなのかど

うか、わたしにはまだわからないので、そういわれるたびに、「ええ、まあ。」とか、「いや、どうも。」とかいって、なんとなくごまかしてしまいます。

わたしが仕事をするのは、おもに夜で、十時ごろからつくえにむかい、明け方の五時ごろまで書きつづけ、それからおふろにはいってベッドにもぐりこみます。おきるのは午後一時すぎで、それから夜までは、人にあったり、どうわのすじをかんがえたりするのです。

さて、これからお話しするのは、わたしがじっさいに経験したことです。もしわたしが、これからお話しするようなことにであわなかったなら、わたしは、これまでとおなじようなくらしをして、これまでとおなじようなどうわを書いていたことでしょう。

それは、いまから四か月と五日まえの夜のことでした。わたしはいつものように、つくえにむかってどうわを書いていました。すると、ピンポーンとげんかんのチャイ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ムが鳴ったのです。
「こんな夜中に、いったいだれだ？」
つくえの上の時計の針は、午前零時をすこしまわっています。わたしはぶつぶついながらげんかんにでていって、ドアをあけました。
するとおどろいたことに、青い背広にえんじ色のネクタイをきちんとしめたきつねが、ふろしき包みをこわきにかかえて、目のまえに立っていたじゃありませんか。
「こんばんは。夜おそく失礼します。」
きつねはていねいにいって、ぴょこりと頭をさげました。
「先生におねがいがあってまいりました。」
「えっ、あっ、そ、そうですか。ま、ま、どうぞ。」
つられてわたしもおじぎをかえしながら、ついそういってしまいました。
「ありがとうございます。それではあがらせていただきます。」

きつねは、ぴかぴかにみがいてある赤いかわぐつを、きれいにそろえてあがりました。

リビングルームに案内すると、きつねはかしこまってソファにこしかけました。なかなかぎょうぎのいいきつねです。

「コーヒーはいかがですか。」

「はい。いただきます。」

そこでわたしは、コーヒーをいれてやりました。きつねは角ざとうを三つほうりこむと、カップを両手で持って、ほそながい口で、すすーっとじょうずにすすりあげました。

「なかなかおいしゅうございますね。」

そういいながらきつねは、ものめずらしそうにへやの中を見まわしました。

「ずいぶんたくさん本がございますねえ。これをみんなお読みになったんですか？」

「いやいや、買ったままほうってある本もだいぶあるんですよ。」
「それでもたいしたものですねえ。……あのう、どうわを書くには、こんなにたくさんの本を読まないといけないのでしょうか？」
きつねはちょっと心配そうな顔つきで、わたしのほうを見ました。
「いやあ、べつにそんなことはありません。わたしは本がすきだから、つぎつぎに読んでるだけなんですよ。ところで、さっきたしか、わたしになにかたのみがあるとかおっしゃってたようですが……。」
「はい。」
きつねは、コーヒーカップをテーブルにおくと、ソファにすわりなおしました。
「ごあいさつがおくれてもうしわけありませんでした。わたくしは、市役所につとめております木常熊造ともうします。もちろん、昼間はちゃんと人間の顔をしております。けれど、先生にはわたくしのほんとうのすがたでおあいしなくては失礼だと思い

まして、こうやってきつねのままでやってまいりました。」
「ふむふむ。それで？」
「じつはわたくし、どうわがすきで、これまでたくさんのどうわを読んでまいりました。そして、自分でも書きたくなって、どうわを一つ書いてみたんでございます。」
「ほほう。」
「ところが、なにしろ生まれてはじめて書いたものですから、ちゃんとしたどうわになっているかどうか、自分でもわからないんです。それで、先生に読んでいただいて、いろいろご意見をおきかせねがえたらと思ったわけなんでございます。」
「なるほど。わかりました。しかし、どうしてわたしのところへきたんです。わたしよりゆうめいで、えらい先生がたがいくらもいるじゃありませんか。」
「いえ、先生でなくてはいけません。」
きつねは、きっぱりといいました。

「なぜかともうしますと、先生がこの本をお書きになったからです。」
きつねは、ひざの上のふろしき包みから、一さつの本をとりだしました。見るとそれは、わたしがつい最近書いた『きつねのボール』というどうわでした。
「わたくしは、この本を読みましてとても感激いたしました！」
きつねはすこしかんだかい声でいうと、ぐっと身をのりだしました。
「なぜなら、主人公のきつねがとてもよく書けているからでございます。まるでわたくしが主人公になったような気さえしました。そしてわたくしはふと思ったんです、こんなにじょうずにきつねのことが書けるのは、ひょっとしたら先生はほんとうはきつねじゃないかと……。」
「ま、まさか！」
「まあ、それはじょうだんでございますが、これほどきつねの気持ちがよくわかる先生なら、きつねのわたくしが書いたどうわも、きっとわかってくださるにちがいない

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com